

四百年の時間が生んだ洗練。 絵付けと見まがう 青磁象眼のなめらかさ。



伝統窯から新進作家まで多彩

なやきものがある熊本で、古くから細川藩の御用窯として知られた八代焼と高田焼。とくに「青磁象眼」の手法は全国でも唯一のもので、高雅上品と呼ばれる作風が愛好されています。かつての藩の注文書も残る、高田焼上野窯を訪ねました。

四百年の伝統を守って

灰色がかつた淡い緑に、白く浮き出るサククラ、キク、ランなどのこまやかな文様。八代市日奈久の高田焼上野窯ギヤラリーには、茶わんや水指などの茶器をはじめ、つぼや皿、きゅうす、ぐいのに至るまで、上品かつ優美な

作品が並びます。

日本でも高田焼だけという青磁象眼の手法に、やはり訪れた人の質問が集まるのでしよう。棚には湯のみに象眼をほどこし、ゆう葉（うわぐすり）をかけて焼き上がるまでが、順を追って実物で示してあります。

高田焼のおこりは、細川氏の肥後入国に従った朝鮮の陶工、尊楷（後の上野喜蔵）に始まります。茶人だった三斎公が八代城に入城したため、尊楷は長男・三男とともに、陶土を求めて八代郡高田村に窯を開きました。

その後は三家に分かれ、御用窯として注文品を作るうちに、洗練された青磁象眼の手法が残っていききました。明治維新で一時は衰退したものの、本家は窯の火を灯し続け、才助さんは父・平さんから十一代を引き継いだのです。

絵付けのように滑らかな象眼

才助さんは作陶に当たっては、「新しいものというより、やはり伝統を守ること」を心がけています。まず、やきものの形と象眼がマッチしていることが大事。ただ文様などでは、新しい試みもしています。とのこと。ギヤラリーからガラス越しに見える工房で、象眼の工程を見せてもらいました。

陶土から成形した素地に竹べらで文様をほり、そのくぼみに水で溶かした白泥（＝天草産の長石）を塗り込むように二度、三度と筆で埋めていきます。作業は文様が複雑になるほど時間を要し、大きなつぼでは象眼に三日かかることも。ほり込みの途中で素地が乾くと筆で水分を補い、また、象眼を入

れるため厚めに作った本体を、あとで内側を削って軽みを出します。

素地と象眼部分の土の成分が異なるため、焼いた場合は収縮率が異なりますが、できあがりには凹凸もなく、ごく滑らか。象眼の手法を知らない人からは、絵付けしたものと間違われることもあるほどです。「一人前になるには十年くらいでしょうか。この仕事は上を見たらキリがありません」

伝統の技法で新しい個性を表現

才助さんの下で修業した長男の浩之さんは、刷毛目、練込、かき落としなど、古い時代の高田で行われていた技法にも意欲的に取り組んでいます。

「父は伝統を守ることが第一に貫いてきました。私は伝統の技法の範囲内で、自分の個性や時代の流れを表現させたいと思っています」と浩之さん。才助さんは、そんな息子のやり方を黙って見守っています。

上野窯は明治時代、日奈久に質のいい土が取れることと、温泉地のにぎわいを求めて高田から移転。かつて藩営温泉だった歴史ある町で、茶器から日常食器なども作られるようになり、一般にも手の届く存在になりました。

以前は登り窯でまきを使って焼いていましたが、火の回り方が均質でなく色むらが出やすかったため、ガス窯に変更。高田の特徴である青磁色が安定して出るようになりました。しかし、



独特の淡い緑色はゆう葉でつけるのではなく、土に含まれる鉄分が発する色



高田焼発祥の窯（八代市平山地区）

陶土はいまでも日奈久の山に窯元自らが取りに行つて作る自家製です。一見なんの変りつもない白っぽい岩石がくだかれ、水に溶いて濾され、キメこまかな土となり、火の作用で成分中の鉄分が淡いグリーンを生み出していく……。目の前の土のかたまりに、端正な作品の姿がだぶつて見えました。



高田焼上野窯十一代
あがの さい すけ
上野才助さん

一九二三年 八代市生まれ
一九四六年 先代の下で修業を始める
一九七二年 十一代を継承
一九七一年 熊本県伝統的工芸品指定



生乾きの素地に竹べらで文様を刻む。この後、象眼をほどこします